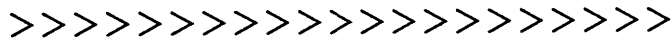


<第5セッション>

韓国における神道研究の現状と課題

李 元 範



I はじめに

韓国で日本の神道が研究の対象となったのは最近のことである。従って、現在までの神道に対する研究成果も取るに足りないものでしかない。日本の他の宗教、日本仏教や儒教、日本キリスト教に対する研究成果に比べても非常に少ないのが実情である。

こうした韓国の状況は、何よりも、植民地時代の経験を通して持つこととなった「国家神道」に対する韓国人のイメージがあるからである。植民地時代に韓国人が経験した神道は、天皇の絶対的な神聖性を根拠としてすべての精神的な価値の上に君臨しようとしたドグマ集団であった。したがって神社も又、今日のように人のお助けを求める場所ではなく、神国日本の優越性と帝国主義の植民地支配を正当化するための意識教育の場であり、権力機関でもあった。

しかし、1990年代に入ると神社に対する韓国人のイメージは大きく変わることになる。1988年のソウルオリンピックを契機に、韓国人の海外旅行が自由化されると、日本へ訪問した多くの韓国人が見た日本の神社は、過去の記憶とははなはだ違う神社であった。最近、新たな傾向をみせる韓国での神道研究はこうした韓国人の驚きとそこから生まれる好奇心をそのモチーフにしていると言える。

II 韓国における神道研究の始まり

韓国における現在までの神道に関する研究成果を年代別に概観してみると、1970年代に修士論文が1つ、80年代に修士論文が3つ、学術論文が3つしかない。しかも、その殆んどが「国家神道」を対象にした研究であった。

それに比べて、1990年代に入ってから現在までの研究成果は、単行本の出版が2つ、訳書が3つ、修士論文が10、学術論文が15となっている。そして、その研究テーマも多様化されていることがわかる。つまり、韓国における神道研究は、「国家神道」に対する一部の研究を除けば1990年代になって本格化されたということである。

前述したように、戦後の日本に訪問する韓国人にとっては、神道集団に対する日本人の態度が意外なものであった。というのは、神道は民主化された日本社会においては廃棄処分されるべきものであると考えたからである。戦後、GHQによるいわゆる「神道指令」は、韓国人の経験からすれば当然の処置であった。韓国での神道に対する研究テーマの多くが「国家神道」のイデオロギー性の告発であるのは、韓国人の神道に対する認識状況からして当然の結果であるといえる。

だが、1990年代に入ると研究状況は大きく変わることになる。というのは、神道が戦後においても日本人の日常と深く関わっているとすれば、それを無視して日本の精神文化を語ることはできないという認識が生まれたからである。又、日本で留学した研究者たちが帰国することによって神道に対する既存の国内での研究とは異なる新たな研究動向が生ま

れたこともその原因のひとつであった。

もちろん、上記のような韓国社会の神道に対する認識の変化が神道に対する具体的な研究成果として直結されたわけではない。そもそも日本に対する研究は、実用的な研究が優先され、人文、社会分野の研究が乏しかった韓国においては、神道に対する社会的な認識の変化とそれに伴う知識人社会の知的な好奇心に込えられるだけの専門家集団が形成されていなかった。

1990年代以降、韓国における神道研究は既存の日本学研究、とりわけ、日本の人文、社会分野の研究動向という大きな流れの中で横断的な関連を持たない各々の研究者による研究成果が生まれたに過ぎない。それゆえ、以下では韓国における日本の人文、社会分野の研究動向を概略し、その流れのなかで神道研究がどのように進行されていたのかをみることにする。

III 韓国における日本研究と神道

戦後、韓国での日本研究は歴史学分野から始められている。それは、当時の韓国の知識人社会の問題意識を反映するものであった。戦後、韓国の知識人社会が共有する問題意識はこれまでの植民地教育によって傷つけられたと判断する民族としての自負心を回復することであった。当時の歴史学の研究のテーマがいわゆる「日鮮同祖論」や「停滞論」、「他律性論」のような植民地時代の朝鮮史観の虚偽性を告発するものに集中されていたのはそのためである。

韓国の歴史学分野において日本の歴史あるいは日韓関係史を研究することは、植民地時代に日本によって教育された自分たちの歴史に対する否定的なイメージを一掃させ民族としての自負心を創り出す新たな歴史認識が必要である、という知識人としての課題意識があったからでもある。従って、戦後の韓国社会における反日主義、又は日本批判は、単純な批判だけではなくこれを通して新たな国民意識を作るためのイデオロギーでもあったわけである。

韓国における神道研究が「国家神道」に対する歴史学分野からの研究から始まり、現在までも最も多い比重を示しているのはこうした韓国社会の日本研究の動向を前提とするものである。

一方、経済学や政治学分野における日本に対する研究は歴史学のそれとは違う。1965年、日韓の「国交正常化」によって相互の人的、物的の交流が増大することによって日本に対する研究もその現実の必要性から新たな動向が生まれるようになった。とくに、60年代以降、経済大国となった日本に対する関心は経済は政治分野に集中されることとなる。だが、こうした関心は非常に実用的な研究に限られたものとなり、文化的、社会的な研究までに広められてはいなかった。従って、経済大国日本への関心が神道研究へと繋がることもなかった。

だが、経済大国日本への関心が神道研究と無関係であったわけではない。というのは、この時から韓国社会においては日本語を学ぶことの実用性が認識され多くの大学で日本語学科が設立されることとなったからである。日本語を「国語」として学んだ戦前世代がいることから教員の供給に困ることなく、韓国の大学における日本語学科は急激に増えることができた。そして、その卒業生の中には日本への留学を選び、日本で神道に関心を持って研究した人もいた。

現在、韓国においては全国の 72 の大学で日本語学科が設置されており、最近ではあるが、日本語だけではなく日本の社会、文化を総合的に教える「日本学科」も 25 の大学に設置されるようになった。そして、多くの大学が大学院課程を持つようになっていて、これからの日本研究者は急激に増えることが予想される。

しかし、70年代から韓国の大学において日本語学科の設立が急激に増えたわりには日本文化、とりわけ神道の研究を専攻とする者は極めて少ないのがこれまでの現状である。それは、前述したように韓国における日本語学科の設置はその実用性からであり、何よりも、教える教員が日本語を「国語」として学んだ世代であったことに起因する。

だが、彼ら教員たちが教えることのできる科目は、せいぜい日本語や日本文学であったことから、日本への留学生も多くの場合、「日本語学」や「日本文学」を専攻と選ぶことになる。

IV 韓国における神道研究の動向

韓国における神道研究は、研究者の問題意識やその研究テーマからして、次のように 3 つに大別することができる。

まず 1 つは、「国家神道」に対する研究である。歴史学分野の研究者が中心となっている「国家神道」についての研究は、1992年に発足した「韓日関係史学会」や、その2年後に発足した「日本歴史学会」などの討論の場を持っていることから、なかなか手固い研究成果を作り出している。

だが、歴史学分野における神道研究は「国家神道は日本の植民地同化政策においてその尖兵の役割をした」という定説を大前提とした研究であり、彼らの主な関心は、植民地統治において「国家神道」が持つイデオロギー性の告発であった。

にもかかわらず、歴史学分野における神道研究は、その研究方法や史料の発掘において蓄積されたノウハウを持っており、これからの神道研究を深化させるにおいて、重要な役割を果たすことができると思われる。日本への留学経験者などによって、既存の研究成果に対する再検討が行われつつあり、近代日韓関係史の定説にも疑いが持たれている今日においては、歴史学分野での神道研究にも新たな展開が期待される。

2 つは、日本文化論としての「神社神道」研究である。これは特定の学問分野が中心であると言えることなくバラバラに行われている。横断的なつながりを持たない個別的研究

が自己完結的に行われているのが現状である。だが、それだけに神道に対する多様な見方が提示されており、神道の多様な側面を理解するうえで肯定的な役割を果たしているとも言える。

日本文化論としての「神社神道」研究は、最近では学術論文だけではなく一般雑誌への寄稿文やエッセイというものまでも含めると、その数がますます増えている傾向であるが、残念なことに日本文化の特異性を発見するための事例としてしか扱われてない。しかも、横断的な議論の場に持ち込まれることもないことから、事実誤認の言説がまかり通ることが少なくない。にもかかわらずこれらの研究が増えることは、韓国社会に神道への関心を高めさせ神道研究の底辺を拡大させることに繋がることは確かである。

3 つは、キリスト教学としての神道研究である。これはキリスト系神学大学での修士論文という形のものがほとんどである。これらの研究テーマは、韓国のキリスト教の殉教の歴史を究明する作業としての「国家神道」研究と、日本への宣教戦略のための日本の宗教文化の理解を求める「神社神道」研究に大別できる。そのなかで宣教戦略のための神道研究は、既存の研究手法や視角にとらわれることなく、独自の課題意識からの研究であることが興味を惹く。例えば、現代の神社の持つ社会的な機能や役割に注目するとか、日本人の日常に与える神社信仰の影響などが意外と緻密に調査されている。

1970年代まで急激な教勢拡張を成し遂げた韓国のプロテスタント教団は、80年代の停滞期を迎えると、日本宣教をその突破口と考える。彼らの研究はこうした時勢を反映したものであるからこれからもその数は増えていくと思われる。だが、神学大学における神道研究は特殊な集団内での議論にとどまっており、一般の研究者の目に触れることはなかった。韓国における神道研究は、こうしたキリスト教学としての研究成果をどう受け止めるかが今後の課題の一つであると言える。

V おわりに：今後の課題

以上、韓国における神道研究の状況を概観してみたが、結論的に言えることは、韓国における神道研究はその量と質とにおいて、独自の研究領域として自立できる段階までに至っていないということである。

研究方法においてノウハウの蓄積された歴史学分野における神道研究は、未だに「国家神道」一点張りという姿勢を崩していない。また多様な視角を持つ日本文化論としての「神社神道」研究は、未だに日本国内の研究を整理、紹介するレベルにとどまっていると言える。そして、独自の課題意識から出発するキリスト教学としての神道研究は、限定された枠のなかでの議論でしかないのが現状である。

従って、今後韓国での神道研究が独自の研究領域として自立し、その研究の質を高めていくためには、何よりも、研究者相互の議論の場が設けられる必要がある。研究者相互の議論を通じて今までの各個の研究が、神道文化の総体的な理解においてどのような位置に

あるのが明確になると、研究者相互の役割分担も可能となる。また、お互いの研究成果の持つ意味を再検討することで、新たな研究の方向性がみいだされることにもなる。

今日のようなシンポジウムが、韓国における神道研究者の議論の場を作る一つのきっかけとなることを期待したい。

質疑応答

【司会】

これからの研究に対する1つの提言といったようなものを含ませながら、韓国の神道研究の現状を非常に手際よく紹介していただきました。韓国の研究が、こういう状況にあるということをご存じの方も、あるいはいるかもしれませんが、初めて知ったという方もいらっしゃると思います。いろいろな観点からご質問をいただければと思います。

【田島忠篤】

IVのところ、「国家神道」「神社神道」という言葉は少しわかるのですが、3番めのところで「神道文化」という言葉が使われていますが、まず質問の1つは、それは一般的に韓国で使われている言葉でしょうか。

2つめは、その「神道文化」の内実として、「神社神道」とイコールなのか、違うとすればどういったところが違うのかという点について、教えていただきたいと思います。

【李】

韓国で「神道文化」という場合、その意味するところは非常に広いといえます。例えば、お祭りの話だとか、初詣、あるいは、七五三とか。要するに神道と関わりを持つ日本の文化という場合、「神道文化」という言葉が使われています。それが「神社神道」とどう違うかと言われると説明しにくいですね。「神社神道」という場合は、「国家神道」を相対化する言葉として用いられる場合があり、神道の伝統的な行事、儀式などをを紹介する場合に用いられる。ですから、両方の違いを明確に区別する使い方はあまりないと思います。

【司会】

大まかな括りということになるでしょうか……。よろしいでしょうか。では菅さん、どうぞ。

【菅浩二】

国学院大学日本文化研究所共同研究員の菅と申します。

まず、戦後の日本における研究でも、朝鮮総督府下の神社政策については、主にキリスト教会との摩擦、葛藤というものを中心に、それを補助線とするような形で描かれるようなことが一般的だったと思っております。神道の諸々のそういった現象、総督府下の神社における諸々の現象を、神道の内発的な問題として描くような研究というのがどこかにないかなと思っておりましたら、なかったのが私がやっているのですが、それは、IVの神道研究の動向というところで言いますと、キリスト教としての神道文化の研究というところを、ある意味でそのまま日本に持ってきているケースも中にはあるのではないかと思います。きょうの先生のお話の中で、それがキリスト教の限定された中での議論に、韓国社会では、いまのところあるということ伺いまして、限定された部分というのが日本に飛び火しているという現状があるのだなということを認識しました。

以上がコメントですが、質問をさせていただきますと、韓国における収奪論に対して、経済学のほうで植民地近代化論などの登場があるということで、先ほど先生は「新たな気配」というふうにおっしゃったのですが、その気配が、例えば今後の神道研究、とくに、私の関心のあるところで言いますと、植民地下の朝鮮の神社神道の研究に対してどういう気配が見られるのかということを知りたいと思います。

【李】

収奪論や植民地近代化論は主に経済史を中心に行われた議論ですね。そして、その議論の中身を簡単に言ってしまうと植民地統治状況に還元して説明しなくても良い経済原理の独自性がどこまで認められるかであると思います。これを宗教史にあてると、植民地下の宗教運動は当時の時代状況に還元して説明しなくてもよい宗教独自の存在根拠をどこまで認められるかであると思います。従って、植民地下の神社神道の研究に「新たな気配」がみられるとしたらそれは神社神道の独自の存在根拠を明らかにする試みとして現れるはずのものです。こうしてみると、最近の教派神道の研究にはそうした試みの結果がみられます。これらの研究によりますと、当時の教派神道である天理教や金光教、あるいは黒住教の布教活動というのは朝鮮の民俗社会との親近感を前提とするものであった。とりわけ、天理教の場合はその入信動機に自分や両親の病気を治してもらったというのがほとんどであった。それゆえ、戦後になっても自分を救ってくれた恩人に向かって厚い感謝の念を持っており今日までも天理教の信仰を持ち続けることが出来た。つまり、戦前・戦後に繋がる韓国における天理教運動は当時の統治状況に還元して説明しなくてもよい独自の存在根拠があった、という主張ですね。ながくなりましたが、答えになったでしょうか。

【司会】

次の方、どうぞ。

【濱田陽】

国際日本文化研究センターの濱田と申します。興味深いご発表をありがとうございます。私がうかがいたいのは、先ほどのハーディカ先生のご報告の中で、ジョン・ダウワー (John W. Dower) とハーバート・ビックス (Herbert P. Bix) の研究が、神道研究と銘打たれてはいないけれども、今後のアメリカにおける神道研究、あるいは、神道に関心を持つ人、それが一般読者に与えた影響ということを言われたと思います。これは韓国語にも訳されていると私は推測しますが、もしくは、訳されていないけれども、すぐに訳されると思いますが、そうした場合に、それらの著作が韓国の次の神道観、あるいは、今後の韓国の神道をテーマに研究する研究者に与える影響というものは、李先生が韓国で研究活動をされている範囲内で何かお感じになられていることがありましたら、教えていただきたいと思っています。

この質問は、韓国における神道研究という意味では逸脱した質問になるかと思いますが、日本、韓国、あるいはアメリカと、いろいろ国を超えるような情報の伝達と言いますか、今回のシンポジウムも、その1つの試みとして開催されたと思いますので、ぜひお願いいたします。

【李】

いまの質問の趣旨をうまくつかめなかったかもしれませんが、韓国の神道研究の状況は他の地域や分野の研究成果を組み入れるための準備が出来てないと思います。何よりも、自分は神道研究を専門にしているんだという自覚を持っている人が少ないし、従って、神道をテーマとする議論の場が設けられることはないとは言えないにしても非常に少ないんですね。各々の学問領域のたこつぼ的な状況のなかで神道研究が散らばっているというわけですね。

【司会】

『敗北を抱きしめて』と『昭和天皇』は、韓国語に翻訳はされているのですか。

【李】

『昭和天皇』はその論旨がマスコミで紹介されたことがあり、翻訳もすでに始められているかも知れませんが、『敗北を抱きしめて』の翻訳は未だだと思います。

【司会】

おそらく、質問の趣旨は、アメリカでこのような日本論が発表されて、それが韓国語にももしも訳された場合に、影響を及ぼす可能性はどうかということだと思います。

【李】

そうですね。一般的にいうとそれは大いにあると思います。しかし、それが神道をテーマとする研究にどれだけ影響を与えられるかということになると疑問がありますね。つまり、神道研究そのものが議論の場を持たず自己完結的に行われるためにその影響も多分に個人的なものでしかならないということですね。

【奥山倫明】

南山宗教文化研究所の奥山です。いまの濱田さんのコメントにも関わるし、前の前のお答にも関わりますが、李さん自身は天理教の研究をされていますよね。それで、教派神道なり神道系新宗教なりですが、韓国における研究の蓄積はたくさんあるけれども、きょうは省かれたのか、それとも、ほとんどないのか。教えていただけますでしょうか。

【李】

今日、私の提示した資料は、韓国で「これは神道研究ですよ」と分類したものを集めたので、分類されていないもののなかにも神道研究と言えるようなものは少なくありません。例えば、近世日本の国学の研究などもそうですね。ただ、いまおっしゃっているのは教派神道の研究ですが、これは神道研究として分類されてもその数が知れていますね。しかも、国家神道に対する教派神道の研究という形で意識してやっているのは私をはじめでだろうと思います。

【司会】

後半のほうに出た問題は、たぶん総括討論にも組み込まれる問題がいくつかありまして、その時間をしっかりとりたいと思いますので、李先生のご発表は、これで終わらせていただきます。(拍手)

韓国内 神道関連研究 目録

〈単行本〉

1. 朴錫伊『日本の神道思想と仏教』韓国仏教通信大学, 1994年.
2. 金南植『国家神道の危険性と信教の自由』ベダニ, 1995年.

〈訳書〉

1. 村岡典嗣著, 朴奎泰訳『日本神道史』藝文書院, 1998年.
2. 阿部正路著, 裴正雄訳『日本文化キーワード神道(原題: 神道がよく分かる本)』啓明, 2000年.
3. 安丸良夫著, 李元範訳『近代天皇制の成立と宗教改革(原題: 神々の明治維新)』昭和, 2002年.

〈学位論文(年度順)〉

1. 李強一「神社参拝の問題と韓国教会の信仰についての歴史的研究」長老神学大学校大学院 歴史神学専攻 修士論文, 1975年.
2. 金美善「日帝時代の神社参拝の問題についての考察」ソウル大学校大学院 社会教育科 歴史専攻 修士論文, 1985年.
3. 金承台「日本の神道の浸透と1910・1920年代の神社問題」ソウル大学校大学院 国史学科 修士論文, 1986年.
4. 蔵田雅彦「日帝下の韓国キリスト教と日本の天皇制との葛藤関係に対する歴史的考察」延世大学校大学院 切神学科 修士論文, 1989年.
5. 金ジャンオン「神道イズムの研究を通じて捉えた日本の宣教戦略についての研究」長老会神学大学校 神学大学院 修士論文, 1994年.
6. 朴太元「近代日本の天皇制の宗教性の形成過程と韓国の教会に関する考察」延世大学校聯合神学大学院 理論神学科 教会史専攻 修士論文, 1996年.
7. 申キョンキュ「神社参拝と韓国教会の対応」ソウル神学大学校神学大学院 歴史神学専攻 修士論文, 1996年.
8. 權赫仁「神道倫理が日本の保守政治集団の歴史意識に与えた影響」漢陽大学校大学院 社会学科 修士論文, 1997年.
9. 文聖洙「日帝の神社参拝政策に対する韓国基督教界の拒否運動の考察」中央大学校教育大学院 歴史教育専攻 修士論文, 1998年.
10. 崔ソンボン「神道の理解を通じての日本への宣教戦略」高麗神学大学校神学大学院 修士論文, 1998年.
11. 孔キオン「神道イズム世界観の研究を通じての日本への宣教戦略の研究」総合神学大学校 宣教大学院 修士論文, 1999年.
12. 崔美卿「日本神道史研究」東亜大学校教育大学院 国民国民倫理切教育専攻 修士論文, 2000年.
13. 朴ヨンヒ「効果的な日本宣教のための宗教文化の理解—神道の理解を通じての日本人の宗教的な定体性 (Identity) に関する研究」ソウル神学大学校大学院 宣教神学専攻 修士論文, 2002年.
14. 林順祿「近代日本の神道についての一考察—国家神道の制度化過程を中心に—」東西大学校大学院 日本地域学科 修士論文, 2002年.

〈論文(年度順)〉

1. 韓再龍「日本文化の特質についての研究—神道との関係を中心に—」（『慶南大論文集』 切）1985年.
2. 李春漠「日本神道の歴史的な変遷過程の考察」（『同徳女大日語文研究』）1986年.
3. 金承台「日本神道の浸透と1910・1920年代の‘神社問題’」（ソウル大『韓国史論』）1987年.
4. 權萬赫「日本の神道の関数主義について—特に日本の中世の本地垂迹・反本地垂迹の形態を中心に—」（『京畿大論文集 30』）1992年.
5. 黄文雄「経済大国日本を捉える鍵‘神道’」（『極東問題 161』）1992年.
6. 尹敬洙・金文吉「檀君神話が日本の修験道に与えた影響に関する研究」（『日語日文学研究 28』）1996年.
7. 李元範「近代日本の天皇制国家と宗教政策」（『日本語文学』第4輯）1997年.
8. 朴奎泰「日本神道にとっての善悪の問題—本居宣長を中心に—」（ソウル大『宗教と文化 3』）1997年.
9. 朴武熙「日本人の宗教観」（西京大『韓日文化研究 2』）1997年.
10. 李元範「教派神道の成立と思想」（『韓国宗教』23輯）1998年.
11. 洪潤基「新羅神を祭る日本最大の祇園祭—仏教と神道の韓日同族説の背景—」（『月刊朝鮮 219』）1998年6月号.
12. 李元範「近代の天皇制国家の国民教化政策と宗教」（『日語日文学 12』）1999年.
13. 申ソキュン「日本文化と神道思想の眺望」（『真理論壇』第3号）1999年2月号.
14. 朴奎泰「日本の近世の神道とナショナリズムについての研究—山崎闇齋と本居宣長の他者の理解を中心に—」（ソウル大『宗教と文化 5』）1999年.
15. 金泰定「日本人の宗教意識」（韓国外大『史学 10』）1999年.
16. 金南植「彼らはどうして神社の参拝を固執しているか—日本の神道の発展とキリスト人の対応—」（『神学指南』第68巻4輯 通巻 第269号）2001年.
17. 金雄哲「檀家制度—日本の寺刹の見えない神道組織」（『佛教と文化』通巻 第45号）2002年3・4月号.
18. 洪潤基「日本の皇国神道を排撃した久米邦武」（『殉國』通巻 140号）2002年9月号.